



TITLE:

清代雍正朝における養廉銀の研究 (三): 地方財政の成立をめぐって

AUTHOR(S):

佐伯, 富

CITATION:

佐伯, 富. 清代雍正朝における養廉銀の研究 (三): 地方財政の成立をめぐって. 東洋史研究 1972, 30(4): 351-388

ISSUE DATE:

1972-03-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/152848>

RIGHT:

清代雍正朝における養廉銀の研究（三）

— 地方財政の成立をめぐる —

佐 伯 富

目 次

一 はしがき

二 養廉銀の起原と沿革（以上第二九卷第一號）

三 養廉銀の財源（以上第二九卷第二・三號）

四 養廉銀額（以下本號）

(1) 耗羨銀額

(2) 養廉銀の耗羨中に占める割合

(3) 地方官の養廉銀額

五 養廉銀制度

四 養 廉 銀 額

(1) 耗 羨 銀 額

(1) 養廉銀額決定の基準

(2) 養廉銀の支給法

(3) 署理養廉と未使用養廉

六 養廉銀の使途

(1) 日用薪水費

(2) 幕友の束脩

(3) 公務の費

七 むすび

前章で述べたように、養廉銀の財源として諸種の贏餘や規禮銀、官莊租、俸工銀等があったが、その主體をなすものは

第一表 各省耗羨率變遷表 (10は加一)

年次		從來	雍正元年	2	3	4	5	6	7	8	13
省分											
直隸	30~40	20	10						13		
山西					13						
河南				13							
山東		25~30	18							16	
陝西	20~50										15
甘肅								15~20			
四川		20		15			30			25	
貴州					10						
廣西					10						
廣東											
福建									10		
浙江	6~8		5						10		
安徽							10				
蘇州							10				
江西										10	

耗羨銀であった。また贏餘や規禮銀はなるほど重要な財源ではあったが、その總額の大略を推定することは不可能である。この點、耗羨銀はあらまし、その總額を算出することができる。耗羨の率については、すでに安部博士が表を作成されている。また私も耗羨の率の遞減についてはさきに述べた。それらを參考にして、耗羨率の變化を表示すれば、次のようである。

耗羨率は耗羨の布政司庫提解が始まって以來、率が輕減された。いま表中に見える輕減後の耗羨率を平均して見ると、大體、加一三、つまり十三%が平均値である。ところで、本稿第三章、第一節b「耗羨率の切下げ」の項で指摘したように、耗羨率加一の場合には、耗羨に諸種の附加税的なものが加えられるので、實際には人民の負擔は加一四五にもなるのが普通であった。そこで耗羨率十三%は、實際には二十%近くにふくれあがり、人民の負擔は、さらに増大したことは間違いない。

ところで、地丁徵銀數については、世宗實錄の毎年の歲末のところに、全國の統計數が示されている。表示すれば次頁の如くである。

第二表 地丁徵銀數

年次	地丁徵銀數(單位兩)	典 據
雍正元年	30, 223, 943	世宗實錄卷14
2年	30, 446, 692	" 27
3年	30, 071, 574	" 39
4年	29, 546, 418	" 51
5年	29, 815, 021	" 64
6年	29, 499, 916	" 76
7年	29, 935, 657	" 89
8年	29, 786, 806	" 101
9年	29, 797, 501	" 113
10年	30, 089, 004	" 126
11年	29, 872, 332	" 138
12年	29, 901, 631	" 150

雍正時代、地丁徵銀數は大體、毎年三千萬兩であるから、耗羨率二十%とすると、約六百萬兩近い耗羨が徴收されたわけである。もともと全額徴收ということは不可能であるから、いま假にその七十%が徴收されたとすると、四百二十萬兩が實徴額ということになる。なお

各省の耗羨率切下げ後における耗羨數の分るもの、および推定數を表示すれば第三表の通りである。

右表の耗羨數の統計は各省の徴收の年代がまちまちであり、且つまた推定數も相當あるので、その總計を出しても、統計數としての價值はうすらぐが、しかし、同年の各省の耗羨統計數を得ることは不可能であるから、これ位で辛抱しなければならぬ。またこの統計によって、各省の耗羨數の概略を知るには大して差支えはない。耗羨は地丁銀を基準に徴收

第三表 各省耗羨數

省 分	年 次	耗 羨 數	典 據
直 隸	雍正 7年	300, 000兩	雍正硃批諭旨 楊鯤39. 83 b
山 西	4年	371, 000兩	蔣洞20. 73 b
河 南	6年	363, 730兩	田文鏡31. 59 b
山 東	8年	490, 000兩	安部耗羨提解228頁
陝 西	3年	270, 000兩 40, 000兩	" "
甘 肅	3年	* 耗糧63, 000石 (51, 100兩)	石文煒11. 97 a
四 川	8年	(160, 000)兩	安部同上
雲 貴	6年	167, 154兩	鄂爾泰26. 71 a
湖 廣	4年	110, 000兩	李成龍13. 6 b
廣 東	6年	(150, 000)兩	安部同上
廣 西	6年	(35, 000)兩	" (筆者推量)
福 建	7年	147, 000兩	劉世明14. 14 b
浙 江	5年	140, 000兩	李衛41. 17 b
安 徽	7年	198, 273兩	魏廷珍37. 77 a
江 蘇	5年	415, 304兩	陳時夏5. 99 b
江 西	5年	145, 923兩	李蘭18. 30 a
奉 天	7年	3, 495兩	王朝恩36. 45 a
	計	3, 557, 979兩	* 糧價はこの頃陝甘で 每石7錢(安部215頁)

第四表 額徴地丁銀數と耗羨銀額數

省 分	年次(雍正)	額 徴 地 丁 銀 數	耗羨銀額數	典 據 (雍正硃批諭旨)
直隸	2. 8. 6	2, 196, 320兩	230, 271兩	李維鈞5. 36 b
山西	4. 10. 4	2, 865, 977兩	實收467, 709兩	伊都立2. 75 a
河南	7. 6. 15	實徴 3, 145, 105兩		田文鏡32. 39 a
山東	康熙末	3, 000, 000兩	60, 000兩	修吉圖8. 38 b
陝西	3	1, 360, 000兩		安部耗羨提解213頁
甘肅	3. 10. 1	260, 000兩 * 49萬石×0. 7=34, 3萬兩	40, 000兩	石文焯11. 97 a
四川	4. 5. 11	343, 144兩 (1, 114, 360兩)	20, 876兩 167, 154兩	佛喜21. 74 a 鄂爾泰26. 71 a, 第一表
雲貴				
湖廣	4. 1. 17	1, 100, 000兩	110, 000兩	李成龍13. 6 b
廣東	4. 4. 14	1, 000, 000兩		楊文乾4. 69 b
福建	7. 1. 25	1, 050, 000兩	147, 000兩	劉世明14. 14 b
浙江	6. 6. 2	2, 000, 000兩	(5. 12. 3) 140, 000兩	高斌50. 68 b, 李衛41. 17 b
安徽	7. 1. 10	實徴 1, 982, 739兩	198, 273兩	魏廷珍37. 77 a
江蘇	5. 11. 6	3, 561, 858兩	415, 304兩	陳時夏5. 99 b
江西	5	(1, 459, 230兩)	145, 923兩	李蘭18. 30 a
奉天	7. 6. 4	34, 592兩	3, 459兩	王朝恩36. 45 a

* この頃甘肅における每石糧價は7錢

され、地丁銀額はそう大して大きな變動はないから、特別な災害や事變のない限り、耗羨徴収額にも大きな變化はないからである。ところで各省の耗羨額の總計は約三百五十六萬兩である。さきに全國の地丁徴銀數から割り出した耗羨數四百二十萬兩との間に、約六十四萬兩のひらきがあるが、大體、三百六十萬乃至四百二十萬兩という數字が當らずといえども、遠からざる耗羨數であろうと思われる。

(2) 養廉銀の耗羨中に占める割合

耗羨銀はさきに述べたように、地丁錢糧を基準に徴收されるから、その錢糧の多い省分が一般的にいて多いわけである。もっとも、地丁錢糧の多い省分ではその徴收率を低くしてあるから、必ずしも地丁錢糧の多い省分の耗羨が多いともいえない場合もある。しかし、概して江蘇・安徽・河南・山東・山西の如く、地丁銀兩の多い省分では、耗羨銀の徴收額が多くなっている。参考のため各省額徴地丁銀數

と耗羨銀數との關係を示す統計を示せば第四表の通りである。

ところで地方經費、これを公項と稱する⁹⁾ならば、公項中には、さきに述べたように、諸種の贏餘や規禮銀があるが、耗羨銀は公項中の主なる部分を占めている。従つて養廉銀の主たる財源も耗羨銀ということになる。それでは養廉銀は耗羨銀の中いかなる割合を占めていたのであろう。換言すれば養廉銀と地方衙門の事務費との割合は如何であつたのであろうか。諭旨（598b）雍正五年十一月初六日、蘇州巡撫陳時夏の上奏の一節に

酌於各州縣耗羨內。扣存二分。以爲養廉。以八分解司公用。以通省之耗羨。辦通省之公務。

とあり、江蘇省では養廉と地方衙門の事務費つまり公務の費との割合は二對八である。また諭旨（1573b）雍正五年十一月初一日、蘇州布政使張坦麟の上奏中にも

輸納正雜錢糧耗羨。俱以加一爲率。以二分留爲州縣養廉。以八分解充公費。

と見え、同様の事實を傳えている。さきに例示したように、江蘇省の耗羨銀は雍正五年には四十一萬五千餘兩であるから、その二割とすると、八萬三千餘兩の養廉銀が耗羨銀内から支給されたわけである。なお江蘇省の養廉銀の財源としては、鹽商からの鹽規銀があり、この額が相當額あり、兩江總督一人だけでも二萬五千數百兩に上つたことは、さきに述べた如くである。江蘇省ではこのほか兩巡撫、鹽政、鹽運使その他の鹽務關係の官吏が多くおり、鹽商から受けた鹽規銀は莫大な額に達したのであろう。兩淮鹽政衙門の鹽規銀は五萬兩にも近かつた¹⁰⁾というから、他は推して知ることができよう。江蘇省などの省分で、耗羨率が低かつたのは、地丁銀額が多かつたせいもあるが、鹽規銀等の收入が多かつたことも一つの大きな原因であろうと思われる。それはともかくとして、鹽規銀等はその一部が公項に入れられていたから、鹽規銀を含めた養廉銀額の公項中に占める割合は五十%以上あるいは七十%も占めていたであらう。それは他の省分の養廉銀、公費との割合からも推察される。

次に諭旨（954a）雍正二年九月初四日、山東巡撫陳世倌の上奏に

至耗羨一項。毎年錢糧。以三百萬兩爲率。……今以加一八通算。約可得銀五十四萬兩。臣等會議。以二十萬兩。彌補虧空。以二十萬兩爲各官養廉。

とあり、山東省では雍正二年、加耗の率を十八%に切り下げ、五十四萬兩の耗羨をえている。このうち二十萬兩をもつて、從來の虧空を彌補し、二十萬兩を養廉としている。残り、十四萬兩が公費ということになる。つまり養廉銀と公費との割合は五十九%對四十一%ということになる。

また諭旨（39 84 b）署理直隸總督事務・提督臣楊鵬の上奏に

直隸本年（七年）耗羨。……實應徵耗羨銀二十五萬五千一百六十一兩零。內給通省各官養廉銀一十七萬九千九百六十兩。

と見える。すなわち直隸省においては、雍正七年、耗羨銀中、養廉銀は七十%を占めている。

また諭旨（13 6 b）雍正四年正月十七日、湖廣總督李成龍の上奏には

查湖北湖南。各額徵銀一百一十餘萬。前督臣楊宗仁。定以加一耗羨。以三分解交各司庫。作起解錢糧飯銀。及闔省各項公務之用。以七分分給司道府廳州縣各官。爲養廉之需。

とあり、湖廣においては、十一萬兩餘の耗羨銀を養廉七十%、公費三十%の割合に分配している。同様の記事は諭旨（22 44 b）雍正七年三月初八日、湖北布政使徐鼎の上奏中にも見えている。

また諭旨（15 90 a）雍正六年十月二十日、署理江西巡撫印務張坦麟の上奏に

至江省耗羨。舊例。加一徵收內。除二分七釐爲解餉並通省公費。其餘係督撫兩司府廳州縣養廉。并起解錢糧鞘木脚費等項。

とあり、江西省では、加一耗羨のうち、二十七%を公費にあて、残りを養廉並びに錢糧の解送費にあてている。解送費は公費とした方がよく、結局、江西省においては、養廉銀は耗羨中七十%ほどを占めていたものと思われる。

第五表 耗羨中における養廉銀と公費との割合

省分	養 廉 銀	公 費
江蘇	20%	80%
山西	47	53
山東	59	41
直隸	70	30
湖廣	70	30
江西	73(70)	27(30)
福建*	56	44

* 印耗羨の外、平餘・雜款等を含む。

次に山西省であるが、諭旨（13 81 b）雍正三年二月初八日、山西布政使高成齡の上奏に

雍正元年分。按各州縣收耗實數。……實收耗銀四十三萬一千九十八兩零。內扣存司庫彌補虧空銀二十萬兩。給發過各官養廉共銀一十一萬一十三兩零。給發各州縣雜項繁費并傾銷脚費。以及御塘馬匹加增草料銀二萬一千二百四十二兩零。又通省公費共銀七萬一千一百兩零。尙餘剩銀二萬七千五百四十一兩零。

と見えている。實收耗羨四十三萬餘兩の中から虧空銀二十萬兩を彌補し、養廉として十一萬餘兩を支出している。虧空彌補銀は特別な場合であるからこれを除くと、養廉銀の耗羨中に占める割合は四十七％である。

つぎに諭旨（14 27 b）に、怡親王允祥が福建巡撫劉世明の上奏文を引用しているが、その中に
所有耗羨平餘及雜款等銀共一十六萬九千二百三十四兩。……每年承辦公務。共應用銀七萬四千七百三十三兩。餘銀九萬三千二百餘兩。分給各員。爲養廉之資。

と見えている。怡親王の上奏文は排列された前後の史料關係から雍正七年のものであることは明らかである。ただここで注意すべきは、十六萬九千餘兩は耗羨のほか、平餘雜款等を含んでいるから、福建省の公項の全額を示すものと思われる。すなわち公項中における養廉銀と公費との割合は五十六％對四十四％ということになる。以上の割合を表示すれば上の通りである。

上表からも分るように、省分によって、いろいろの條件があり、耗羨中における養廉銀と公費との割合は、一定はしていないが、大體、養廉銀が七十％、公費が三十％というのが、普通であつたらしい。もっとも、養廉銀といつても、後述するうちに、公私の區別がはっきりせず、官吏個人の生活費のほか、公務のために使用する場合もかなりあつたのである。これについては章を改めて論ずるので、ここでは

總督巡撫以下地方州縣官の養廉銀支給額の實際について考察を加えよう。

(3) 地方官の養廉銀額

さきに述べたように、雍正帝が養廉銀の支給を開始した當初においては、上にあつて職階制的なところが多く、同じ總督であっても、その地位の重要さによつて養廉銀額に多少があり、また總督個人の能力如何によつても差異があつた。それは雍正帝の政治に對する信念、つまり上級の官吏に有能な者を拔擢し、これに充分な手當てを與えて上の政治を肅清すれば、下、これにならつて政治はうまく運営されるという雍正帝のかたい信念にもとづくものであつた。従つて第六表に示したように、各省の總督の間に大きな開きがあり、同じ總督のポストであっても、その人と年代によつて大きな相違があつた。例えば雲貴總督についていえば、雍正三年、高其倬には二萬六千兩の養廉銀が支給されたが、雍正六年、鄂爾泰は一萬七千兩に減額されている。これは鄂爾泰の才能が高其倬に劣るためではなく、この頃雲南貴州においては、施政がようやく緒につき、多額の養廉銀を支給する必要がなくなつたためか、あるいは鄂爾泰は滿洲出身の雍正帝のもつとも信頼した股肱の臣ともいふべき者であり、その生活も質素であつたので、この額で充分やつてゆけたのであろう。浙江總督の李衛等も生活が質素であり、家計に必要な米は郷里から送らせたので、一萬三千兩の養廉銀で間にあつたらしい。それはともかくとして、總督の養廉銀は七千兩から三萬兩まで、大きな幅があつたことが認められる。

次に巡撫の養廉銀も七千兩から三萬九千兩餘まで、大きな幅が見られ、同じポストでも、その人と時代とにより、変化があることは總督と全く同じである（第七表参照）。

なお、ここで注意しておきたいのは、總督や巡撫は文官であるが、同時に軍隊をも指揮するので、武官に與えられる親丁名糧^③を支給される。諭旨（5572 a）雍正十年六月二十日、署福建總督郝玉麟の上奏中に

第六表 總督養廉銀額

省 分	年 次	總 督 名	養 廉 銀 額	典 據
直 隸	雍正 5 年	宜兆熊(署理)	7,000兩	諭旨宜兆熊 14.94 b
	7 年	楊 鯤(署理)	正協 二員 20,000兩	諭旨, 楊鯤 39.80 a
山 西	5 年		30,000兩	世宗實錄 54
河 南	5 年		30,000兩	〃
陝 西	5 年		30,000兩	〃
雲 貴	3 年	高其倬	26,000~27,000兩	諭旨, 高其倬 45.71 a
	6 年	鄂爾泰	17,000兩	諭旨, 鄂爾泰 26.88 b
廣 東	4 年	楊文乾	9,000兩	諭旨, 楊文乾 4.69 b
福 建	10 年	郝玉麟(署理)	16,000兩	諭旨, 郝玉麟 55.72 a
浙 江	8 年	程元章	13,000兩	諭旨, 程元章 52.96 a
	12 年	李 衛	約 13,000兩	諭旨, 李 衛 42.78 b
江 南	9 年	高其倬	22,000兩	諭旨, 高其倬 46.85 b

第七表 巡撫養廉銀額

省 分	年 次	巡 撫 名	養 廉 銀 額	典 據
山 西	雍正 4 年		31,700兩	諭旨, 伊都立 2.70 a
	5 年	總督管理伊都立	30,000兩	世宗實錄 54
河 南	5 年		30,000兩	〃 〃
山 東	5 年	署理, 塞楞額	20,000兩	諭旨, 塞楞額 10.38 a
陝 西	5 年	張 保	20,000兩	諭旨, 張 保 17.16 b
甘 肅	7 年	許 容(蘭州)	11,900兩	諭旨, 許 容 53.19 a
四 川	5 年	馬 會 伯	39,560兩	諭旨, 馬會伯 12.20 a
雲 南	3 年	石 禮 哈	8,500兩	諭旨, 高其倬 45.75 b
	6 年		12,000兩	諭旨, 鄂爾泰 26.88 b
	7 年	總督兼理 鄂爾泰	9,000兩	諭旨, 鄂爾泰 27.36 a
湖 廣	5 年		14,000兩	諭旨, 福 敏 10.24 a
廣 東	4 年	楊文乾	9,000兩	諭旨, 楊文乾 4.69 b
廣 西	10 年	金 鉷	8,400兩	諭旨, 金 鉷 49.93 a
福 建	7 年	劉世明	33,000兩	諭旨, 劉世明 14.16 a
浙 江	10 年	程元章	10,000兩	諭旨, 程元章 52.96 a
江 西	5 年	布蘭泰	8,800兩	諭旨, 布蘭泰 6.29 b
	6 年	署理, 張坦麟	7,000兩→10,000兩	諭旨, 張坦麟 15.90 a

馬糧六十分。一年約有銀二千餘兩。雖係向來督臣衙門相傳舊例。云云。

とあり、福建總督には馬糧六十分、約二千餘兩が支給されていた。また諭旨（1716b）雍正五年八月十六日、陝西巡撫張保の上奏中に

查陝西省撫臣。有親丁名糧五十五分。舊例相沿。每年在於撫標兵糧內。扣存餉乾米料草。共折銀一千五百七十兩零。爲撫臣湊用之項。

とあり、陝西巡撫には親丁名糧千五百七十兩餘が支給されていたのである。これらの収入を考慮にいと、總督の養廉銀額は約二千兩、巡撫は約千五百兩増加するわけである。

なお漕運鹽務關係の官吏、ならびに布政使、按察使、道員、府州縣官の養廉銀額を参考のため表示すれば次の通りである。

第八表 學政・漕運・鹽務官吏養廉銀額

省分	學政	總河	副總河	協理河務	鹽務關係	典據
直隸	2,000兩(2)	4,000兩(10)	2,000兩(10)		巡鹽御史20,000(2)	議旨、宜兆熊14.94b, 劉於義47.67a 莽鵠立 16.3b
河南	4,000 (2)	署理8,000(12)	3,000 (6) 6,000 (7)	2,000 (7)	鹽運使 10,000(6) 運同 2,000(6) 運判 1,600(6) 鹽場大使 300 鹽經大使 歷 批驗所大使 } (6)	石文焯 11.67a, 高鶴 50.91b 哲曾筠 44.48a, 田文鏡32.1a 田文鏡 31.90a
四川	3,000 (5)				鹽政 4,800(6)	憲 德 34.79b 高其倬 45.75b
雲貴	2,000 (3)				鹽運使 3,000(12)	李 衛 41.40a 趙弘恩 57.66a
浙江						

() 丙午代數

第九表 布按養廉銀額(*印公費を含む)

省 分	布 政 使	按 察 使	典 據
直 隸	10,000兩(5)	8,000兩(5)	諭旨, 宜兆熊14.94 b
河 南	* 24,000 (2)	* 10,000 (2)	石文焯11.67 a
山 東	10,000 (5)	署理 4,660(4) 10,000 (5)	塞楞額10.38 a, 張保17.9 b 田文鏡31.90 a
陝 西	14,000→10,000(7)		黃廷桂50.18 a
雲 貴	4,000 (3)	3,000 (3)	高其倬45.75 b
廣 東	9,000 (4)		楊文乾 4.69 b

第十表 道 員 養 廉 銀 額

省 分	養 廉 銀 額	典 據
河 南	開 歸 道 * 10,000兩(2) 管 河 道 4,000 (2) 南 汝 道 3,000 (2) 河 北 道 4,000 (6) 糧 道 3,000 (6) 糧 道 3,200 (7) 管 道 2,800 (7) 河 北 道 3,000 (7) 南 汝 道 2,800 (7)	諭旨, 石文焯 11.67 a 田 文 鏡 31.44 a 田 文 鏡 32.28 b
山 東	道 員 6,000→3,000 (6)	田 文 鏡 31.79 b
甘 肅	道 員 1,000 (3)	石 文 焯 11.97 a
陝 西	榆林, 神木, 漢興道 500 (7) 驛 傳 道	查 郎 阿 50.18 a
雲 貴	貴 東 道 2,000 (3) 貴 西 道 1,800 (3) 鹽 道 5,000 (6)	高 其 倬 45.75 b 鄂 爾 泰 26.43 b
廣 西	左右江二道 各 1,600 (8) 蒼 梧 道 2,400 (8)	“ 28.23 b
湖 廣	辰 沅 靖 道 5,000 (7)	王 朝 恩 36.66 b
浙 江	寧 臺 道 3,000 (6) 溫 處 道 3,000 (6) 兵 備 道 1,600→2,600	李 衛 41.90 b 程 元 章 52.90 b
安 徽	下 江 道 3,000 鳳 陽 道 2,000	徐 本 37.16 b
* 印公費を含む。 () 内年代數		

以上の表を見て分るように、學政、總河、鹽臣等はともかくとして、布政使は四千兩から一萬四千兩、按察使は三千兩から一萬兩の養廉銀が支給され、道員は陝西省の如く邊境では僅かく五百兩というののもあったが、大體二三千兩から四五千兩の養廉銀が支給されたのである。知府は八百兩から四

千兩まで、二三千兩というのが普通であつたらしい。直隸州知州は一、二千兩、府州の屬官、同知・通判は大體四五百兩、知州縣は四五百兩のものもあつたが、後には大州縣は千二百兩、中州縣は千兩、小州縣は八百兩ほどになったようである。さらに州縣の佐貳・雜職官にも養廉銀が與えられた。官吏としては最下層のものである。いかほどの養廉銀が支給されたか考察を加えよう。諭旨(3144a)雍正六年二月初三日、河南總督田文鏡の上奏中に

直隸州州同・州判。又直隸州吏目。并府屬之州同・州判・吏目。各縣之縣丞・典史。俱有承督盤查親民之責。請將直隸州州同・州判。每員量給銀一百二十兩。其餘各官。每員量給銀八十兩。以上直隸州州同一員。州判六員。吏目七員。府屬之州同一員。州判三員。吏目四員。縣丞十員。典史九十七員。每年共應加養廉銀一萬六兩。

とあり、河南省の府州縣の州同・州判以下の官吏に養廉銀を支給することを願ひ出ているが、雍正帝はこれを裁可している。すなわち州同・州判には每員百二十兩、それ以外の吏目・縣丞・典史等には八十兩を支給している。その總額は一萬六兩であつたという。

また諭旨(3239a)雍正七年六月十五日、河東總督田文鏡の上奏中には

查豫省司府首領官共十四員。每員給銀一百兩。經管地方之巡檢共六員。每員給銀八十兩。二項共銀一千八百八十兩。とあり、河南省の司府の首領官には百兩、巡檢には八十兩を支給し、その總額は千八百八十兩であつた。

また諭旨(3716b)江南總督高其倬・安徽巡撫徐本の上奏に

其藩臬兩司首領官三員。各府首領官共十一員。州縣佐貳・吏目・典史・巡檢・大使等官。共一百五十員。……每員該給養廉銀五十兩。通共需銀八千二百兩。

とあり、江南總督高其倬・安徽巡撫徐本は布・按兩司、各府の首領官、州縣の佐貳・雜職官に各々五十兩の養廉銀を支給することを請ひ、裁可を得ている。また諭旨(5018a)雍正七年十二月十一日、署陝西總督查郎阿西安巡撫武格の上奏に陝屬尙未分給養廉之首領・佐雜等官。共一百四十二員。每年應給養廉公費共銀一萬零六兩。

と見え、陝西總督查郎阿等は首領・佐貳官百四十二員に對し、養廉公費一萬六百兩を支給せんことを請うているが、雍正帝はこれに對し、「佐貳雜職之議。尙屬可行。」といつて許可している。ここに養廉公費とあつても、養廉銀の意味である。これによれば、陝西省では一員平均七十四兩ばかりの養廉銀が首領・佐貳・雜職に支給されたわけである。

また諭旨（2872b）雍正九年正月二十八日、雲貴廣西總督鄂爾泰の上奏には

其餘雜職。如經歷・照磨・司獄・吏目・長官司吏目・典史・巡檢等。黔省共七十七員。原應議給。然又約需五千餘兩。とあり、雲貴・廣西總督鄂爾泰は貴州省の雜職七十七員に對し、養廉銀約五千兩を支給せんことを請い、雍正帝は裁可している。一員あたり六十五兩である。また諭旨（2244b）雍正七年三月初八日、湖北布政使徐鼎の上奏にも

再查。佐雜微員。巡查地方。看守堤工。歷來均有陋弊。自應一并議給養廉。以便嚴行禁絕。統計議分各官。約有二百六七十員。須銀五萬餘兩。

とあり、湖北布政使徐鼎は、佐雜百六七十員に對し、五萬餘兩の養廉銀の支給を請うている。雍正帝はこれに對し、公平にやれと命じている。湖北省では佐雜でも地方を巡查したり、堤工を看守する等特別な公務があり、養廉銀の額も多かったらしい。一員あたり、二百九十四兩乃至三百十二兩の額となる。

湖北省の首領・佐雜官は特別な公務があつたために養廉銀の額は多いが、普通の省分では、大體、五六十兩から百二十兩位の養廉銀が支給されたようである。

以上、總督巡撫から州縣の佐貳・雜職に至るまでの養廉銀の實際の支給額について、考察を加えてきた。これらの額は俸銀とはどういう割合の關係にあつたのであろうか。俸銀は官品に従つて支給されるので、清史稿卷一二二「職官志」と光緒大清會典事例卷二四九「俸餉」とにより、官品と俸銀との關係を示す表を作成すれば、次頁の如くである。

ところで先掲の總督・巡撫の養廉銀額表に見えるように、總督巡撫の養廉銀額は三萬兩を超えるものもあつたが、平均すると大略二萬兩と一萬八千兩ほどである。これをその俸銀百八十兩と百五十五兩とに比べると、總督・巡撫の養廉銀額

っていたであろうか。諭旨（924a）雍正元年十一月二十二日、山東巡撫黃炳の上奏に

山東巡撫衙門。舊有各屬節壽禮銀六萬餘兩。丁地規禮銀一萬餘兩。司庫羨餘銀三萬兩。驛道糧道規禮銀各二千兩。鹽道及鹽商規禮銀各三千兩。合計十一萬餘兩の規禮銀等が届けられていた。ところで、雍正五年、山東署理巡撫の塞楞額には養廉銀二萬兩を支給している。大體、二萬兩というのが巡撫の普通の養廉銀額であったようである。すると山東巡撫の實際の収入額は、從來に比べて五分の一乃至六分の一に切下げられたことになる。また諭旨（2961a）雍正三年正月二十四日、河南巡撫田文鏡の上奏に

臣查。據河南巡撫任內。一年所有各項陋例。不下二十萬兩。臣復聞輿論。楊宗義在任。並非循良清正之員。每歲所入。爲數尙多。

と見え、河南巡撫田文鏡の言によれば、河南巡撫には一年間に二十萬兩を下らぬ陋規があった。前巡撫楊宗義は循良潔癖な官僚にあらず、これがためにこのような多額の収入があったのであるといっている。雍正五年の頃、河南巡撫は三萬兩の養廉銀を受けているから、巡撫の収入は約七分の一に減らされたことになる。雍正帝は陋規を徹底的に禁止したわけではなく、そこに幅をもたせていたのであるが、ともかく養廉銀の支給によって、官僚は實質的には從來の収入の五分の一乃至七分の一ほどに減らされたわけである。ここに裏面においては官僚の強い反對があったことが豫想されるのである。

五 養廉銀制度

(1) 養廉銀額決定の基準

諭旨（35 64 a）雍正八年四月十一日、山東布政使孫國璽の上奏中に
今養廉公費。俱分別衝僻支給。

とあり、山東省では養廉公費は、府州縣の衝僻を基準にして支給するといっている。衝とは衝要の意味である。また諭旨（45 47 b）雍正三年正月二十六日、雲貴總督高其倬の上奏中には

自巡撫司道以下及府州縣。分別衝僻繁簡。酌定養廉之數。

とあり、雲貴では巡撫司道以下府州縣の養廉銀數は、そのポストの衝僻だけでなく、事務の繁簡を考慮して定めるとある。この事務の繁簡とは、諭旨（5 98 b）雍正五年十一月六日、蘇州巡撫陳時夏の上奏中に

查各州縣之繁簡。惟在錢糧耗羨之多寡。即以錢糧耗羨之多寡。定州縣之養廉。

とあるように、錢糧耗羨の多寡が主として事務の繁簡を意味したようである。また諭旨（15 59 b）雍正七年正月二十九日署理江西巡撫張垣麟の上奏中に

其各官養廉。則分別地方之大小。事務之繁簡。減其有餘。增其不足。酌量均派。

とあり、府州縣の大小ということも、養廉銀額決定の要件となったのである。第十一表「府州縣官養廉銀額」を見れば、容易に理解されるであろう。

次に諭旨（39 101 b）雍正七年二月十五日、湖南布政使趙城の上奏に、養廉の使途について述べた中に

臣今現與撫臣商酌。就官職大小。事件繁簡。通長計算。酌量均分。務使普沾聖澤。

と見え、湖南においては、布政使趙城は、事務の繁簡とともに、官職の大小をも考慮して養廉銀數を決定するといっている。

以上述べたところにより、養廉銀額は、その缺の管轄する地域の大小、衝僻、繁簡、官職の大小などを斟酌して決定されたことが判明する。

(2) 養廉銀の支給法

第三章第一節「耗羨提解」の條において述べた如く、耗羨を一旦、全部、布政司庫に解送して地方公費となし、然る後、諸官僚に更めて養廉銀を支給するというのが、雍正帝の基本方針であった。それは地方上官の屬官に對する飽くなき需索と、それにもとづく人民に對する誅求を禁止するためであった。諭旨（1964b）雍正九年十二月初六日、湖北巡撫王士俊の上奏にも

夫司道府廳養廉。私相授受。不免開餽送需索之端。

と見え、湖北巡撫王士俊も、司道府廳の官がその養廉銀を州縣官から個人的に受領すれば、餽送需索の端を免れないと指摘している。ともかく養廉銀は布政司庫から支給するというのが原則であった。しかし、さきにも觸れたように、直隸・江西・湖廣などの諸省における耗羨の少ない州縣では、一部もしくは全部の耗羨をそのまま州縣に止めて養廉として支給している。

耗羨の布政司庫解送を免除したのは、耗羨數が少ないというのが一つの理由であるが、さらに耗羨銀を移動すれば、運送費がかかり、運送の途中、盜難あるいは船の沈没等にある危険があるほか、授受の際、官吏や胥吏の需索がしばしば行われるということも、その理由である。しかし、雍正時代には、州縣で養廉銀を支給したのは數省にすぎず、例外であった。ところが、乾隆二年になると、耗羨の布政司庫提解が改められ、州縣官はもよりの州縣において養廉銀を受領することになったのである。

それは上述の理由のほか、養廉銀支給の回数とも關係があつたかもしれない。人民が規則通りに錢糧を納付すれば、養廉銀を一度に支給することも可能であろうが、滞納や延納が多くなると、そうはゆかぬ。ここから養廉銀は毎月もしくは

四季毎に支給されたのである。諭旨（3782 a）雍正七年十月二十五日、江南安徽巡撫魏廷珍の上奏中に各官養廉。……陸續按季給發各官養廉。

とあり、安徽省では養廉は四季毎に支給されている。また諭旨（3228 b）雍正七年五月初四日、河東總督田文鏡の上奏には

將豫省各道。於現給養廉外。每員每年加給一千兩。請於雍正七年爲始。在司庫耗羨內。按季支給。則各道均沐天恩於無既矣。

とあり、田文鏡は河南省道員の養廉銀を毎年毎員一千兩を加給し、これを四季に分ちて支給したいと請い、裁可されている。また諭旨（598 b）雍正五年十一月初六日、蘇州巡撫陳時夏の上奏中にも

應給〔江蘇〕各衙門養廉。照所定之數。按季給發。

とあり、江蘇省においても、養廉銀は季ごとに支給されている。

以上は地方官に對するものであるが、このほか諭旨（4886 a）雍正八年二月初六日、陝西布政使方觀の上奏中に

督臣李衛以臣護理鹽政三月。將雍正七年鹽政衙門養廉銀兩。按季撥給臣一千二百兩。

とあるように、鹽務關係の官吏も同様であった。また諭旨（321 a）雍正七年二月十一日、河東總督田文鏡の上奏中には、諭旨を引用している。

行令布政司。每年於司庫存公銀兩內。撥銀一千兩。自奉旨之日爲始。按季支發。以爲協理河務。兪都御史臣徐湛恩養廉之資。

すなわち、河務官にもやはり、四季毎に養廉を與えるよう命じている。以上述べた所により、養廉銀は四季毎に支給するのが普通であったことが判明するであらう。

ただ諭旨（2945 b）雍正二年十一月二十日、署理河南巡撫・布政使田文鏡の上奏中に

茲於本年十一月十一日。接到撫臣石文焯來字內開。除從前養廉按月支領外。將九月以來未經支領養廉銀兩。照奏過數目給發。統於明歲奏銷。彙核奏聞等語。

とあり、雍正二年、河南省では、毎月養廉銀を支給していたことを傳えているが、養廉銀實施の草創期にあたり、財源が充分に確保できなかったために、毎月支給していたものと思われる。河南省も先にふれたように、後には四季毎に支給することになったのである。

なお新たに赴任する官僚の支度料、旅費として養廉銀を豫支し、官僚を高利貸の手から救済しようとする制度が、次の乾隆時代に制定されたが、これについては曾て發表したことがあるので、ここでは注意するに止めたい。

(3) 署理養廉と未使用養廉

ところで養廉銀は職務俸という性格がつよく、他の職務を兼ねると増給された。諭旨(52 90 b) 浙江總督程元章の上奏中に

兵備道王斂福。前在杭嘉湖道任內。年給養廉銀一千六百兩。因兼辦海塘公務。又增給銀一千兩。俟工竣停其添給。とあり、浙江の兵備道王斂福は、さきに杭嘉湖道の任にあった時、養廉銀千六百兩を支給されたが、海塘公務を兼辦したために、一千兩増加された。その工事が竣工してから増加分は停止されたという。また同書に

乍浦新設滿漢船廠。經臣題明。委令該道(杭嘉湖道)。監督料理。業經准有部覆。則該道督辦船工。亦有往返奔馳。差遣盤費等項。若僅給銀一千六百兩。實有不敷。應請仍舊例。年給養廉銀二千六百兩、以足用度。

とあり、杭嘉湖道は船廠を督辦し、旅費等がかさむから、養廉銀千六百兩に千兩を増加したいと、總督程元章は上請しているが、裁可されたようである。また諭旨(49 14 a) 雍正六年七月十三日、署理山東巡撫印務布政使丘濬が山東省の道員

等の養廉銀支給に關して上奏したるに對し、雍正帝は次のような硃批を與えている。

所議大小各員。均屬妥協。惟田文鏡今既兼督東省。亦當增給養廉銀萬金。方爲合宜。督臣統轄將弁。較之撫臣。賞犒所需。尤覺繁多。在伊自難啓齒。汝未議及於此。殊屬忽略矣。

すなわち、大小各員の養廉銀額は妥當である。しかし河南總督の田文鏡は山東總督を兼務しているから一萬兩を増給せよ。總督は巡撫に比べると、將弁を統轄し、賞犒費も多いはずだ。田文鏡自らは言い難いので、汝がこのことに言及しなかったのは粗忽の誹は免れぬと、丘濬は雍正帝から叱られている。この件はまもなく實行に移された。ところが田文鏡は上奏を上り、河南では二萬八千九百兩の養廉を受け、充分であるからと辭退したが、雍正帝は許さなかった。

此番添給之議。實奉朕命。而非出於丘濬之意。何乃如是堅辭耶。

すなわち今度の養廉銀増給の議は、朕が命じたものだ、丘濬の意見に出ずるものではない。どうしてそんなに堅く辭退するのかと雍正帝はいっている。雍正帝のきめ細い政治のやり方の一斑を示している。

ところで諭旨(3910b)雍正六年十月十一日、湖南布政使趙城の上奏中に

其有署事兼攝官員。雖公事繁多。不無需費。但既有本任養廉。未便又全給署任養廉。應請扣存一半。貯司庫。統歸公項。以爲地方公用。

とあり、署事兼攝官はすでに本任の養廉があるから、半額を支給し、半額は司庫に貯えて地方公費に充てたいと、趙城は上請しているが、雍正帝は「督撫臣と商酌して之を行なえ」と硃批を與えているから、この通り實施されたようである。諭旨(5710b)湖廣總督邁柱・湖北巡撫趙弘恩の上奏にも

至署事之員。既有本任養廉。則署事之銀。應給一半。其餘一半。留充公用。

と見え、同様のことを上請しているが、雍正帝は次のように硃批を下している。

舉凡直省此等奏請。朕槩付之一覽而已。是當與否在汝等秉公斟酌辦理也。

すなわち、朕は奏請を一覽するのみ、汝等が公平に斟酌して辦理せよ、といっているから、このまま實施されたであろう。先に掲げた諸例から考えると、兼務官の養廉銀額は大體本任の半分というのが、めやすであつたようである。そしてその半分は公費として使用するために、司庫に貯えられたのである。つまり使用し盡せぬ養廉銀は、地方公費にまわされたのである。諭旨（34 86 b）雍正六年八月二十六日、四川巡撫憲德の上奏中にも

查川省各官養廉內。有離任之員。而接任官未及到任之日。尙有截贖銀兩一項。原令布政司清查季報。以充本省公用之需。

と見え、四川省では官僚が離任し、接任官が到任しないと、離任した官僚の養廉銀が残ることになる。これを截贖銀と稱し、通省の公用に充當したという。また諭旨（48 95 a）雍正十二年五月十八日、四川巡撫鄂昌の上奏中にも

藝頤一堰。若得修築疏濬。……甚有裨益。請於各官養廉截贖銀兩內。動支六百兩。委官督修。據實造報。

とあり、藝頤堰を疏濬するために、養廉の截贖銀を使用せんことを上請しているが、雍正帝は「水利を興修するは、原と善舉に係る」という殊批を與えているから、裁可されたであろう。

なお少し時代は下るが、高宗實錄卷一三四九、乾隆五十五年二月癸酉の條に

〔兩廣總督〕福康安前以木植一案。罰繳養廉公俸。

とあり、兩廣總督福康安は、木植事件（糧船）に連坐し、罰として養廉公俸の支給を停止されている。また同書卷一二六六、乾隆五十一年十月壬寅の上諭に、邪教八卦會の首犯が一人も拏獲されぬことを述べた後に

所有直隸・山東・河南三省。督撫藩臬。除新補人員外。俱著停其養廉。不准支領。

とあり、直隸・山東・河南三省の總督・巡撫・布政使・按察使の、新しく補任した者を除き、その養廉銀の支給を停止せよと命じている。以上の諸例は乾隆時代のものであるが、雍正時代にも、處罰を受けた官僚の養廉銀は、一時、停止されたであろう。そしてその養廉銀も恐らく地方公費として使用されたものと思われる。

以上によって使用し盡せぬ養廉銀は公費として使用されたことが明らかになった。

しかし省分によっては、これと反対に、年により定額の養廉銀額に達せぬ地方もあった。諭旨（2872b）雍正九年正月二十八日、雲貴廣西總督鄂爾泰の上奏中に、次のように見えている。

地丁糧米耗羨。係有常額。猶不致缺少。稅羨一項。盈縮不常。不能以一時查出之數。遂爲定額。是以當石禮哈任內。本年卽缺銀九千一百六十餘兩。不得已。議將各官養廉。九扣給發。尙有不止九扣者。

すなわち貴州省では地丁糧米の耗羨が少なく、稅羨が養廉銀の重要な財源であった。耗羨は毎年大體常額が得られるが、稅羨は商業の盛衰と關係があり、不景氣になると減少する。石禮哈の任内（雍正三年）稅羨が缺少したために、各官の養廉を九掛あるいは九掛以下にしたことがあるといっている。養廉銀を減額支給した例は、雍正硃批諭旨の中には、これだけしか、發見しえなかったが、ともかく、このような場合も、かなりあったことと思われる。

六 養廉銀の使途

(1) 日用薪水費

養廉銀はさきに述べたように、元來、地方官に與えられた職務俸であるが、しかし公私の別がはっきりせず、地方官の私生活だけでなく、衙門の修理や諸種の公務のためにも使用された。この點、衙門の公費と區別しがたい所もある。それでは養廉銀の使途は如何なるものであったのであろうか。諭旨（4278b）雍正八年九月初六日、浙江總督李衛の上奏中に

浙省恩賞各官養廉銀兩一案。原議督撫兩衙門。除養贍家口本身用度。延幕辦事外。尙有各項公務之需。

と見える。養廉銀は家口の養贍と本身の用度、すなわち官僚の個人的經費と幕友の束脩、つまり幕友の謝禮金と各種の公

務のために使用される。養廉銀の使途は大別するとこの三項目になる。もともと家口のうちには家人が含まれる。家人は官僚の私生活の仕事もするが衙門内の公務にも携わるので、家人に對する經費は私用か公用かということになると、はなはだ曖昧になるが、ここでは一應私費のうちに含めて論を進める。なお以上の三項目を示す例を記すると、諭旨（1297b）雍正六年五月初十日、福建巡撫朱綱の上奏中に、鄂爾泰の言を引いて、次のようにいう。

據鄂爾泰云。所得養廉銀兩。督臣衙門與臣衙門無異。臣方敢於收受。沾皇上天恩。以爲犒賞兵弁・幕賓束脩・日用薪水並赴閩盤纏等費。

すなわち兵弁を犒賞する費と、赴閩の盤纏、幕賓の束脩とはともに公費に當る。日用薪水はもちろん官僚の私生活費である。

それでは養廉銀中、私生活經費は一體どの位を占めていたのであるうか。もちろん官僚個人の性格、その地位、時代によつて異なるが、若干の具體的な例を示そう。諭旨（4685b）雍正九年十一月初十日、兩江總督高其倬の上奏に對する雍正帝の硃批に

鄂爾泰到京。據奏。家口薪水之費。萬金委屬過多。每月以五百金計之。一年六千金。儘敷用度。云云。

とあり、雲貴總督であつた鄂爾泰が都に歸り、雍正帝に對して、家口薪水費は年間六千兩もあれば充分であると報告している。先きに表示したように（第六表）雍正六年、雲貴總督鄂爾泰の養廉銀額は一萬七千兩であるから、その三十五%が雲貴總督の私生活費であつたことになる。

また諭旨（5319a）雍正七年三月十二日、蘭州巡撫許容の上奏中に

查臣衙門。向有養廉銀一萬一千九百餘兩。……又有親丁馬糧四十五分。內分給臣衙門筆帖式十五分。尙有糧三十分。

歲支銀七百五十兩。糧料四百五十石。……今約略計算。每年齎摺進京往返路費。並臣衙門心紅・紙張・本摺箱匣。及本標城守三營考驗犒賞・幕賓束脩・家人工食。約需銀七千三四百兩。尙餘銀五千餘兩。并所有糧料。爲一切薪水日用之

費。

とあり、蘭州巡撫の養廉銀額は一萬一千九百餘兩、そのうち公費・束脩費が七千三四百餘兩、なお五千餘兩並びに糧料を薪水日用の費となすことができる。親丁馬糧はしばらく除外し、養廉銀だけについて考えると、薪水日用費はその四十二%に當っている。

また諭旨（1611b）雍正三年四月初三日、江西布政使常德壽の上奏中に

除臣衙門一切公用約共銀四千五百兩。又臣幕賓束脩一千五百兩。每年共該用銀六千兩。……至於臣日用薪水等費無多。總不過三二千兩。

と見え、江西布政使では公費六千兩に對し、日用薪水費は三二千兩にすぎなかったという。三千兩とすれば日用薪水費は三十三%となり、二千兩とすれば二十五%となる。

以上の例はわずか三例にすぎず、また總督、巡撫、布政使といった高級の地方官の例であるが、これによって、高級の地方官にあつては、私生活費は養廉銀額中、大體三、四割を占めていたことが明らかになった。

日用薪水とは官僚の私生活費と考えてよからう。先掲の史料に本身用度、家口養贍費、家人工食とあるのはその主なものである。なお諭旨（2736a）雍正七年二月二十四日、雲貴廣西總督鄂爾泰の上奏中に、養廉銀の使途を述べ

臣曾用七百兩。贖出舊典老屋。再添數百兩。拆造裝修。爲臣祖父。改置祠堂。並用九百餘兩。再於墳園立碑三通。以表祖父墓道。

といっている。すなわち、舊典の老屋を買戻してこれを修理し、あるいは祖父の祠堂を改置し、墓道を標示する石碑を建てる費用等にも養廉銀は使用されたのである。また諭旨（3366b）雍正九年五月初四日、河東總督田文鏡の上奏中にも

臣蒙皇上恩賜養廉。餘剩銀兩。意欲即買此屋。令家口往彼居住。

と見え、その殊批に

據奏。欲置屋保定。安頓家口。俱無不可。

とあり、河東總督田文鏡が病氣のため上京し、家族を住まわせるために、養廉銀をもって保定に家屋を求めんと上奏しているが、雍正帝はこれを許可している。

ともかく日用薪水費は官僚の私生活費であって、與えられた養廉銀の三四割を占めていた。これだけの額があれば、官僚の私生活は餘裕があり、かなり、ゆつたりとしていたらしい。諭旨（174b）雍正四年七月十三日、山東布政使張保の上奏中に

臣蒙聖恩。賞給養廉銀兩。日用衣食。全蒙飽煖。

とあり、養廉銀を支給されてから、日用の衣食が飽煖を蒙っているといっているが、決して雍正帝に對する媚辭ではなからう。山東布政使の養廉銀額は一萬兩であるから、その三四割は三四千兩になる。これだけの生活費が俸給以外にあれば、生活はゆつくりしたはずである。以上述べたところは上級の地方官についての例であるが、下級の地方官も俸給の數倍の養廉銀を支給される。しかも、下級の地方官になればなるだけ、責任も軽く、公務のために養廉銀を支出することも殆んどなく、養廉銀は殆んどそのまま私生活費として使用することができたものと思われる。このように考えると、養廉銀の支給によって、官僚の私生活は一應安定したものであるといえることができる。

(2) 幕友の束脩

前節で述べたように、養廉銀の使途には官僚の私生活費、公務の費とともに幕友招聘の費が、重要な項目となっていた。總督・巡撫以下知府・知州・知縣に至るまで、長官を輔佐し、胥吏を監督するために幕友がおかれたのである。州縣官の幕友の仕事は刑名・錢穀・書啓・掛號・徵比の五種があり、繁劇の地では十餘人、簡地では數名、少なくとも刑名・

錢穀の二名は是非とも必要であつたという。諭旨（1944b）雍正八年四月十一日、廣東布政使王士俊の上奏に

臣前爲河南祥符縣知縣時。刑名・錢穀。案牘紛繁。必需幕賓。以資助理。

とあり、王士俊が曾て河南省祥符縣の知縣たりし時、刑名・錢穀の書類が繁雜であつたので、幕友を招いて助理させたといっている。州縣では最少限二人の幕友は必要であつたのである。この州縣幕友の束脩は乾隆の始め頃、一年に百兩であつたというから、二百兩あれば二人の幕友を招くことができたであろう。ところで、雍正時代、知州縣の養廉銀は大州縣で千二百兩、小州縣では八百兩、貴州省等邊境では四五百兩のものもあつたが、ともかく二人の幕友を招聘することは充分できたはずである。邊境の州縣では束脩も數十兩でもなり手があつたであろう。

しかし、以上の數字からも分るように、養廉銀中に占める束脩の額の割合は大きい。いま假に小州縣の養廉銀八百兩中、幕友最低限二人の束脩を二百兩とすると、養廉銀中二十五%が束脩ということになる。實際には幕友の數はもっと多いので、養廉銀中に占める束脩額の割合はもっと大きいであろう。ただ先にも引用したが、江西布政使常德壽の養廉銀八九千兩中、束脩は千五百兩あつたという。すなわち束脩は養廉銀中十七%乃至十九%を占めている。この束脩は數名の者の合計であるが、州縣の束脩より、養廉銀中に占める割合は低い。それは高官になるほど養廉銀支給の割合は大きくなるが、幕友の束脩は社會的な通念があり、高官の幕友だからといってそれに比例して束脩が多くなるとも考えられない。従つて州縣等下級の地方官ほど、養廉銀中、束脩に支拂う割合は大きかつたものと思われる。いずれにしても養廉銀中、幕友に支拂う束脩の額は相當大きな割合を占めていたのである。このことは近世中國の地方政治において幕友の地位がいかに重要なものであつたか、いいかえると官僚の性格がいかなるものであつたかを端的に示すものといえよう。

(3) 公務の費

地方衙門には公費があり、地方行政の運営費として諸種の方面に使用されたことについては岩見宏氏の詳細な研究がある。^⑧ところでここに述べようとする養廉銀は、元來、地方衙門において、公費とは別枠の項目として設定されたものであるが、実際には公費と殆んど變るところがなく、公費としても使用されたのである。養廉銀の公費として使用された使途は多岐に亘り、また上級下級の衙門によっても異なるが、いま主要なものをあげると、第一には衙門の維持費である。これは大別すると、建物の維持費と人件費とに分れる。諭旨（1354b）雍正五年二月初一日、廣東布政使常賚の上奏中に、養廉銀の使途について述べている。

臣家口衣食用度・幕賓束脩・併修理衙署庫藏等項。共用去銀八千八百餘兩。

つまり廣東布政使では衙門や庫藏の修理費が、養廉銀の重要な使途の一つであったという。また諭旨（163b）雍正二年十月初二日、巡鹽御史莽鵠立の上奏中に、養廉銀の使途を述べた中で

捐造新設巡鹽守備・把總駐劄衙署・兵丁營房。動用銀八百兩。

の如くいつている。衙門や兵丁の營房の新設にも養廉銀が使用されたのである。また諭旨（5766a）雍正十二年八月初六日、江南總督趙弘恩の上奏中に養廉銀の使途について

製辦營中器物。粘補衙署。

とあり、衙署の粘補とともに器物等の製作費にも使用されている。

次に衙門内の人件費である。諭旨（5075a）雍正七年十一月初四日、蘇州布政使高斌の上奏中に、衙門に封鎖された書辦について述べた後に

分住各房書辦。已於七月十一日。封鎖關防。其所需薪水之費。於恩賞臣養廉一萬兩內。一年賞給衆書辦銀一千兩。按月散給。

とあり、封鎖された書辦の薪水費として、蘇州布政使高斌は、養廉銀一萬兩中から、一千兩を割いて與えている。また諭

旨（44 25 b）雍正三年十月初二日、副總河嵇曾筠の上奏中に

副總河有巡查兩岸工程。稽查錢糧之責。出門車馬・船隻・幕賓・書吏・從役飯食。及紙張等物。俱不能無費。とあり、副總河には、工程を巡查し、錢糧を稽查する責があり、そのための車馬船隻の費、幕賓の束脩、書吏、役人に對する飯食銀、その他紙張等の事務費が必要であるから、養廉銀を交付してほしいと上請したるに對し、雍正帝は「養廉之需。安可一日缺乏。」といっているから、そのまま裁可されたものと思われる。すなわち書吏や役人の飯食銀も養廉銀内から支給されたのである。

第二には衙門の運營費である。これには旅費、稿勞費、事務費等がある。諭旨（49 93 a）雍正十年正月十二日、廣西巡撫金鉞の上奏に

臣自任巡撫以來。蒙恩添給養廉共銀八千四百兩。……每有調遣差使・文武勞賞・捐恤等項。

とあり、廣西巡撫金鉞は、旅費、文武の勞賞、捐恤を養廉銀の重要な使途としてあげている。また諭旨（57 66 a）雍正十二年八月初六日、江南總督趙弘恩の上奏中に、總督の養廉銀の主な使途をあげて

賞兵・及製辦營中器物・粘補衙署・差委盤費。

といい、賞兵・器物費・衙門粘補の費のほか、旅費をその一つにあげている。また諭旨（12 97 b）雍正六年五月初十日、福建巡撫朱綱の上奏中にも、養廉銀の使途をあげ

犒賞兵弁・幕賓束脩・日用薪水並赴閩盤纏等費。

兵弁の犒賞、幕賓の束脩、日用薪水のほかに旅費を計上している。以上の史料によって、旅費と文武兵弁に對する犒賞費が、養廉銀の重要な使途であったことが判明する。以上の三例は巡撫の場合であるが、さらに下級の地方官においても同様であろう。諭旨（36 66 b）湖南辰沅靖道王柔の上奏には

蒙恩賜五千金養廉。以爲犒賞之需。

と見え、道員王柔に犒賞の需として、養廉銀五千兩を與えている。湖南土司經營のためである。また諭旨（1428b）雍正七年十一月十七日、署理福建總督・巡撫劉世明の上奏中には、福建の知府の養廉が道員より多い理由を述べて

知府一官。職司民牧。……及巡歷縣治。察盤倉庫等項。往來費用。過於道員。

とあり、知府は縣治を巡歷し、倉庫を盤査するために、旅費は道員よりも多いといっている。ともかく旅費・犒勞費は衙門運営の重要な項目であり、養廉銀がそれに使用されたのである。

次に事務費である。諭旨（1716b）雍正五年八月十六日、陝西巡撫張保の上奏中に

撫臣衙門心紅・紙張等項。……於臣養廉內捐備。

とあり、陝西巡撫衙門の心紅・紙張の費を巡撫の養廉内から支出している。また諭旨（2940b）雍正二年十一月初九日、署理河南巡撫・布政使田文鏡の上奏内に

署內勺水。亦係恩賞養廉銀兩買用。

と見え、布政司衙門の勺水を養廉銀をもって購入している。その他、衙門の諸種の設備費にも養廉銀は支出されたものと思われる。

なお衙門の常時の運営費ではないが、特別なものとして、無著虧空の抵補がある。諭旨（4278b）雍正八年九月初六日、浙江總督管巡撫事李衛の上奏に

今浙省從前題明未完無著虧空銀兩。已將存留臣巡撫衙門養廉銀。雍正六七兩年分。共二萬兩。八年分二千五百兩。以之添補。悉經全數清完。

とあり、浙江總督管巡撫事の李衛は、巡撫衙門の養廉銀をもって、無著の虧空二萬二千五百兩を補填している。また諭旨（5296a）浙江總督程元章の上奏にも

至恩賞巡撫每年養廉銀一萬兩。存於藩庫。抵補從前無著虧空。迨後虧空已經補足。

と見え、浙江巡撫の養廉銀一萬兩を藩庫に存し、これをもって従前の無著虧空を抵補し、後に全完したといっている。

不時の支出としては賑濟銀がある。諭旨（5156 a）雍正八年十月二十二日、暫署兩江總督史貽直の上奏中に

其離城遙遠。運米不及者。臣等各捐養廉銀。先行賑給。以濟燃眉。

とあり、總督の養廉銀を捐出して賑恤を行なっている。また諭旨（493 b）雍正六年六月初九日、山東布政使調任山西布政使丘濬の上奏にも

再查。巡撫陳世倌有捐存養廉銀四千七百二十九兩零。布政使張保有捐存署按察司任內養廉銀四千六百一十兩零。通計養廉銀九千三百三十九兩零。留以補還捐賑銀數。

とあり、山東巡撫陳世倌、布政使張保の養廉銀より捐出せる銀九千三百三十九兩をもって、賑濟の銀數を補還している。無著虧空や賑濟費は常時あるわけではないが、その額が大きいのが注目される。

なお以上の外、布政司・按察司等の地方衙門が、中央の六部に奏銷を求める際には、飯食銀を届ける。これを部費と稱しているが、公費もしくは養廉銀内から支出された。諭旨（1494 b）直隸總督宜兆熊の上奏中に

按察司衙門。每年刑名飯食銀六百兩。應聽該司於養廉內。自行支給。

とあり、中央の刑部に送る飯食銀は按察使の養廉銀内より支給することを上請しているが、雍正帝は「在爾等酌量爲之」という硃批を與えている。また諭旨（3101 a）、雍正八年正月初十日、河南河道總督孔毓珣の上奏中には

南河每年應解飯食銀一萬七千六百五十兩。係奏明養廉之項。催令解部。經前署河臣尹繼善。行令淮揚・淮徐二道。轉飭起解。

とあり、工部の飯食銀は河臣が道員に命じ、關係官に轉飭して養廉銀内より起解させたという。

以上、地方衙門の維持費、運営費、特別費等に分つて、養廉銀の使途について、考察を加えた。以上は主要なものについて述べたのに止り、そのほか、蝗災、水利事業、その他、各種の方面に養廉銀が地方行政費として使用されたわけであ

るが、公費と重複する場合が多いので、ここではこれだけに止めておく。

以上、述べたところにより、養廉銀は地方衙門の維持と運営には、缺くことのできぬ重要な公費であったことが明らかになったことと思う。しかも、官僚が俸給に數倍乃至百十數倍する養廉銀を支給され、その生活が一應安定したことは、官僚の綱紀を振肅する上において、かなりの成果をあげたものと思われる。

七　む　す　び

以上、養廉銀の起原と沿革、養廉銀の財源、養廉銀額、養廉銀制度、養廉銀の使途の五章にわたって、養廉銀の實態を分析してきた。この制度は雍正帝の軍機處の設立、地丁併徴の制、太子密建法の制定とともに、劃期的な意義をもつものであった。この制度により、これまで地方官が闇々裏に懷にしていた耗羨銀や陋規が明るみに出されて規制され、その額が軽減されたことは、人民にとっては大きな恩恵であった。そして地方經費が一應明確化し、豫算化されたことは、地方行政實施の上において、大きな進歩といわなければならぬ。またこれまで後暗い方法で官僚の生活を支えていた耗羨や陋規が、一應、布政司庫に提解され、養廉銀として公平にポストの繁簡衝僻に應じて更めて支給されたことは、地方官の生計を一應安定せしめ、黒い霧につつまれた從來の官場にある明かるさをもたらし、官界の肅清に役立ったことは疑いを容れぬところである。

ところで、先きに述べたように、養廉銀は俸給の數倍から百十數倍にも及び、官僚はこれによって生活は一應安定したとはいふものの、從來、彼等が受けていた陋規や耗羨の額に比べると、實際には六七分の一にも減額されたのである。養廉銀制定の當初、官僚がいろいろの理由をつけて反對したのは、一つにはここに原因があったのである。官僚の反對も雍正帝の在位中は、雍正帝の權威に慙伏してあまり表面化せず、養廉銀の制度は、ともかく次第に全國的に實施され、その

支給範圍も地方正官から佐貳・雜職官にまで及び、ついには中央政府の官にまで擴大されるに至ったのである。その背景には田文鏡・諾岷等の如く、養廉銀の實施に對して熱心に取組んだ官僚のいたことも事實である。こうして養廉銀制度の實施により、雍正時代、官界がある程度肅清され、地方政治がかなり圓滑にうまく運営されたことは認めなければならない。

ところが、次の乾隆時代にうつると、君主獨裁權の弱體化とともに、養廉銀の制度は、雍正時代における職階制的な意味を失い、固定化して單なる増俸という意味しかもたなくなっている。そしてこれまで慇懃していた官僚が次第にその本性をあらわし、養廉銀のほかに、さらに人民に對して加派を行ない陋規を要求するに至るのである。

もっとも、雍正時代においても、なお養廉銀のほかに陋規が行われていた。諭旨（418 a）雍正三年八月初三日、署理貴州巡撫・威寧總兵官石禮哈の上奏中に

地方陋規。向因養廉不敷。藉口派取。竭民苗之脂膏以供費用。甚屬苦累。

とあり、貴州省では養廉が足らぬということに藉口して、民苗から陋規を徵取している。諭旨（4547 b）雍正三年正月二十六日、雲貴總督高其倬の上奏中にも

黔省錢糧。額寡耗羨無幾。或以養廉不足。加派民苗。

とあり、貴州省では地丁錢糧が少なく、從つて耗羨も僅かしかなく、養廉が足らぬため、民苗に加派を行なっていると、同じことを傳えている。

養廉の不足をかこち、増額を要求する傾向は乾隆時代に入ると目立って多くなる。清高宗實錄卷六九、乾隆三年五月の條に

安徽巡撫今陞刑部侍郎趙國麟奏。前任撫臣程元章。因地方公事繁多。養廉不敷辦理。奏請將蕪湖・正陽二關。書役飯食及一切浮費裁減節存之項。解貯安慶府庫。爲巡撫衙門辦公之用。

とあり、安徽巡撫程元章は地方公事が繁多で、養廉で辦理することができぬという理由で増額を上請し、みとめられている。また同書卷九五、乾隆四年六月の條には

又奏。巡撫養廉不敷辦公。請照督臣衙門。另給公費之例減半。每年賞給公費銀二千兩。得旨。此在汝可耳。著照所請行。

とあり、貴州巡撫の養廉が足らぬため、公費銀二千兩の増加を請い許されている。養廉銀の増額は總督や巡撫だけでなく、州縣官も同様である。同書卷四六九、乾隆十九年七月の條に

湖北巡撫張若震奏。湖北原定養廉六百兩之州縣。內遠安……當陽等十五州縣。地要事繁。實不敷用。應各增銀二百兩。とあり、湖北遠安等十五州縣の養廉六百兩を増加している。また同書卷二三七、乾隆十年三月癸巳の條にも

增廣西同知・通判及州縣各官養廉。

とあり、廣西省の同知・通判・州縣各官の養廉を増額している。

かように養廉の増額が流行すると、それにつけこんで、諸種の不正が行われる。同書卷八四九、乾隆三十四年十二月丙子の條に

又諭。據哈寧阿奏。盤查司庫雜項銀兩。有前撫良卿。長支本年冬季養廉銀九百九十餘兩。係原任布政使張逢堯經放。請將張逢堯交部嚴加議處。其良卿豫支銀兩。並於張逢堯名下勒令追賠。

と見え、貴州布政使張逢堯は巡撫良卿のため養廉銀を長支している。長支とは後で豫支といいかえているから、將來、支給すべき養廉銀をあらかじめ支給することである。もちろんこれは違法であり、張逢堯に追賠を命じている。巡撫良卿はたびたび養廉銀の豫支を布政使に要請したらしく、同書には

又良卿尚有豫支三十五年春季養廉銀八百兩。高積署布政使時。長支養廉銀七百八十餘兩。皆係高積經放。

とあり、署布政使高積からも養廉銀の豫支をうけている。同書諭旨には、これに續いて

各省養廉。例應按季支放。今黔省既有透支之事。恐他省似此者。亦所不免。著再申諭各督撫藩司。嗣後無論大小等官養廉。一概不准透支。其藩司自支養廉。並將支用日期。報明督撫存案。如有故違豫支者。該督撫即行參究追賠。

とあり、養廉銀の支給は毎年四季に行なうのが規定である。然るに貴州省で透支（豫支）しているとすれば、各省でも行われているに違いない。各督撫藩司は、大小官の養廉に論なく、一切の透支を禁止せよ。藩司は支給した養廉の日期を督撫に報告せよ。督撫はもし豫支ある時には、考究追賠を行なえと、嚴重な命令を下している。最後に諭旨は

所有伊經放之良卿豫支養廉及伊借支養廉共一千九百二十餘兩。均著落張逢堯名下。十倍賠繳。以示懲儆。

といい、布政使張逢堯が巡撫良卿に豫支もしくは借支した養廉銀一千九百二十餘兩は、その十倍を彼から賠繳させて懲儆を示せよ、と命じている。ともかく、こういう嚴諭が下されたことは、養廉銀の豫支や借支が相當廣く行われていたことを示す證左であらうと思われる。

それでは何故このような不正が流行したのであらうか。それは雍正時代の反動として、乾隆帝が官僚に對する取締りを弛め、綱紀が漸くゆるんで來たことが一つの大きな原因であるが、それとともに物價が騰貴し、支給された養廉銀では生計を支えきれず、公務を遂行することがむづかしくなったことが、大きな原因のようである。皇朝經世文編卷三九、楊錫紱「陳明米貴之由疏」（乾隆十三年）に

臣生長鄉村。世勤耕作。見康熙年間。稻穀登場之時。每石不過二三錢。雍正年間。則需四五錢。無復二三錢之價。今則必需五六錢。無復三四錢之價。

と見える。楊錫紱は江西省清江の人である。すなわち、清江では康熙年間、米は每石二三錢にすぎなかったが、雍正年間には四五錢となり、乾隆十三年には五六錢にもなり、二三倍にはね上っている。乾隆時代でも前期と後期とでは、物價に大きな開きができてゐる。乾隆五十八年に撰せられた洪亮吉の卷施閣文甲集卷一「生計篇」には次のようにいつている。

五十年以前、わが祖父や父の時には、米一升は六七文にすぎなかった。また布一丈は三四十文にすぎなかったと聞いて

ている。今は米一升三四十文、布は一二百文にも上っている。

つまり、乾隆末年には、米は乾隆初期の五六倍、布は三五倍にも騰貴している。田地については、前掲の楊錫紋の上疏の中に、さきごろ毎畝一、二兩のものは乾隆十三年には七、八兩になり、さきごろ七、八兩のものは、二十餘兩に至っていると見えてゐる。このように乾隆時代には、物價が相當大幅に上昇している。これは平和が繼續し、人口が増加して需要が増大したことも一つの原因であるが、一方多量の銀が外國から流入し、中國内の銀の存在量が急増したことが一つの大きな原因のようである。^⑥この物價の上昇は以後の時代も續いている。羊價等も康熙時代には一匹一錢八分であつたが、清末、道光・咸豐の頃には六倍になり、大工左官等の工賃も、清初には一日二十八文であつたものが、道光の初めには八十四文、三倍に騰貴し、咸豐・同治には二百二十文、清初の八倍にもなつてゐる。^⑦

ともかく、清朝も乾隆以後は、とくに物價の騰貴が甚だしく、清朝末期には、物價は雍正時代の數倍に上昇してゐたのである。ところが、養廉銀は俸給と同じく、一度固定化すると、殆んど増額がない。ここから養廉銀が本來の機能を果たすことがでなくなつたのである。

さらに清末になると、財政の不如意から、この養廉銀さえ、支給を停止されたり、減額されるようになった。文宗實錄卷八五、咸豐三年二月戊子の條に

先是太僕寺卿李維翰。奏請暫停養廉以充軍餉。命軍機大臣等。會同該部議奏。至是議上。武職自三品以上停給二成。文職自一品至七品暫給廉銀六成。八品以下免其停扣。此項銀兩。令各該省藩司覈明數目。提出另存。由督撫專摺奏報。聽候撥用。俟軍務告竣。仍復舊額。從之。

とあり、太平天国の亂に軍需費が急を告げたために、武官は三品以上、二割を停給し、文官は一品から七品に至るまで、四割を停給して軍餉にあててゐる。軍務が終了してから舊に復するといふのである。

養廉の停給は相當、長く繼續したらしく、穆宗實錄卷二二、同治元年二月辛丑の條に、前任順天府尹蔣琦齡が、詔に應

じて十二策を敬陳している。その一節に

我朝優禮臣工。於俸祿之外。復給養廉。顧名思義。豈宜裁撤。即使捐攤減折。究屬有勝於無。

と見え、養廉銀の裁撤を思い止るよう上請している。これに對し

該府尹所奏。殊於政體有礙。斷不可行。

該府尹のいうところは、政體に障害があるから行なうべからずという諭旨を下しているから、養廉銀の停給は同治時代に入っても、なお續いていたのである。同書卷四〇、同治元年閏八月甲午の條の上諭の中に

近日兩江總督曾國藩・江西巡撫沈葆楨。請裁革江西攤扣各款。以清弊減。

と見え。兩江總督曾國藩・江西巡撫沈葆楨が江西省の養廉を始め、その他の攤扣を停止してほしいと上奏している。これに對し、諭旨はいかにすべきかを酌量し、妥議具奏せよといっているから、養廉銀の停給は間もなく停止されたものと思われる。太平天国の亂も漸く終末に近づき、軍需費の必要が緩くなったからである。しかし咸豐三年から十年間、官僚の養廉銀の停給は地方政治の運営に大きな障碍をもたらしたことは疑ない。こうして雍正帝によって制定された養廉銀制度も、物價の上昇と、財政の緊迫、綱紀の腐敗から清末にはその機能を發揮することができず形骸化し、地方政治は混亂して清朝の衰亡を早めて行くのである。

註

⑤⑥ 安部健夫「耗羨提解の研究」(東洋史研究一六、四・『清朝史の研究』所收)。

⑤⑦ 拙稿「清代雍正朝における養廉銀の研究」第三章第一節b。

⑤⑧ 岩見宏「雍正時代の公費に關する一考察」東洋史研究一五、四。

⑤⑨ 本稿第三章第三節C「鹽規・茶規」參照。

⑤⑤ 拙著「清代鹽政の研究」第五章第三節「官僚胥吏の需索」

⑤⑥ 拙稿「清代養廉銀の豫借について」(東方學三〇・『中國史研究』第二、所收)。

⑤⑦ 武官には文官のような養廉銀がないので武官は軍隊の定員の給料をうけながら、定員中の若干を空席のままにし、そこから浮いた費用を空糧と稱し、その日用もしくは公務の用に使用した。空糧は馬糧と歩糧とに分れていた。これはまた親丁名糧、

略して名糧ともいわれた。

⑤⑥ 同⑤⑦

⑤⑧ 諭旨(3228b) 河東總督田文鏡、雍正七年五月初四日條。

⑤⑨ 宮崎市定「清代の胥吏と幕友―特に雍正朝を中心として―」

(東洋史研究一六、四)

⑥① 同前

⑥② 同⑤

⑥③ 拙稿「清代の奏銷制度」(東洋史研究三二、三・『中國史研究』第二、所收)。

⑥④ 全漢昇「美洲白銀與十八世紀中國物價革命的關係」(歷史語言研究所集刊二八)。

⑥⑤ 内藤虎次郎「清朝史通論」内「清朝衰亡論」三七八頁。

(昭和四十六年九月二日稿了)

東洋史研究叢刊二十一之一

中國史研究 第二

佐伯 富著

A5判 本文七五八頁 索引七五頁

定價 四千八百圓

本書はおよそ昭和三三年から四五年まで十一年間に著者が學術雜誌などに發表した論文二十三篇を輯録した論文集である。本書に収めた論文において、著者は獨裁君主權の發達とその權力機構並びにその經濟的基盤を追及するとともに、獨裁政治が社會に及ぼした影響、とくに經濟界や官僚に與えた影響について考察を加えている。

右書御希望の方は本會まで御申込み下さい

京都市左京區吉田本町

京都大學文學部内

東洋史研究會

振替京都 三七二八番